

7月の西日本豪雨で南側の車線が約50メートルにわたって崩落した日比の国道430号。市中心部と渋川地区を結び、市民生活を支える幹線道路の一部は25日間、全面通行止めになった。災害から5カ月がたった今も崩落部分がシートで覆われ、片側交互通行が続く。

県内各地に甚大な被害をもたらした西日本豪雨。市内では人的被害はなかったものの、道路の崩落、土砂崩れなどが相次いだ。御崎では空き家2棟が土砂崩れで全壊した。民家の被害は玉、和田の2棟が半壊し、番田や胸上などの5棟が一部損壊した。床下浸水は田井、八浜町八浜などで計13棟に上った。

道路は国道430号の崩落のほか、田井の県道倉敷飽浦線、滝の県道玉野福田線も道路脇の斜面

西日本豪雨

中

が崩れ、土砂や木が道路を覆った。3カ所とも片側交互通行が続ぎ、管理する県備前県民局によると、県道倉敷飽浦線は来年3月、国道430号は同7月、県道玉野福田線は同12月の全面復旧を目指す。指して工事を進めている。

市や市社会福祉協議会は災害直後から、被害が大きかった倉敷、総社、高梁市へ職員を派遣。現地では被災者の安否確認や健康管理、被災家屋の調査、ボランティアの受け入れ調整などに携わり、復旧活動を支援した。

8、9月に倉敷市真備町地区で計13日間、避難所運営の支援をした市都市計画課の藤坂直樹

高校生ら被災地で活動

さん(35)は「夜になって多くの被災者が長期間のたも街灯や民家の明かり避難所生活でストレスを抱えていた。積極的に話を聞き、少しでも不安を取り除くように努めた。倉敷市真



西日本豪雨で片側車線の約50メートル区間が崩落した国道430号＝7月7日、日比

備町地区で家屋のがれき、土砂の撤去作業をした玉野高2年の小坂美里さん(17)、内藤結菜さん(17)は「自分も何かしたいと思った。猛暑で長時間の作業ができず、もどかしさを感じることもあったが、住民に感謝され、もっと支援しなければと強く感じた」「私たちを含め若い人たちがもっと支援を続けていかないといいけない」と話した。

市は10月、被災地に派遣した職員の報告会を庁内で開催。現地での活動内容や課題を全職員で共有し、防災体制の強化に役立てる。市社協は被災地支援から得られた教訓を基に、発電機の配備など常設型ボランティアセンターの拡充に努める。市危機管理課の大賀英明課長は「市内でもいつ大規模災害が起きるかわからない。被災地で活動した多くの職員の貴重な体験を生かし、災害に強いまちの実現に努力する」と強調する。

(内田貴大)

(C) 山陽新聞社 無断複製・転載を禁じます。

国道430号崩落 全面通行止め